

事業完了報告書

調査研究期間等

調査研究期間	令和4年5月13日 ～ 令和5年3月15日
調査研究事項	<p>《委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究》</p> <p>I. 教育課程に関すること</p> <p>IV. 教職員の配置・研修に関すること</p> <p>V. 環境整備に関すること</p> <p>VI. その他夜間中学における教育活動充実にに関すること</p>
調査研究のねらい	<p>ア. 高齢者や外国人向けのカリキュラム開発</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大阪産業大学国際学部国際学科教授を教員研修（年1回）の講師として招聘し、継続的な指導を受ける。専門的な日本語指導及び支援の視点を取り入れながら、多様な生徒に対応した教育課程の編制を行い、教育活動の充実を図る。 ・神戸YWCA学院の識字・日本語指導講師を研究授業や研究協議（年3回）に招聘し、継続的な指導を受ける。 ・日本語指導を体験的に学び、教科における授業力の向上を図る。 <p>イ. 不登校経験者支援（学齢生徒も含む）のための相談体制の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大阪多様性教育ネットワーク共同代表を教員研修（年1回）の講師として招聘し、教員の支援や相談体制の拡充を図り、多様性教育を主軸においた人権教育をさらに推進する。 ・障害者差別解消や平和学習など、人権教育の講師として活動をされている当事者の方を招聘し、生徒を対象にした講演会（年1回）を開催する。講演会を通して、不登校経験者をはじめ多様な背景を持つ生徒同士の相互理解にも力を入れ、安心して安全な学校生活の環境づくりに力を入れる。 <p>ウ. 他市町村の夜間中学や域内の中学校、近隣の定時制高校との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国夜間中学校研究会（全夜中研）、近畿夜間中学連絡協議会（近夜中協）、兵庫夜間中学振興会における諸会議や合同行事を通して、他の夜間中学との連携強化を図る。また、先進地域での取組を情報収集するとともに、お互いの成果や課題を意見交換し、環境整備を含めた教育活動の充実を図る。 ・域内の中学校や近隣の小学校との児童生徒同士の交流をさら

	<p>に推進する。交流を通して、児童生徒の自己有用感を高めるとともに、夜間中学の広報活動にも力を入れる。</p> <p>オ. 専門スタッフ（看護師や通訳など）を活用した教育活動の在り方について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢な生徒や特別な支援が必要な生徒が益々増えていく中、養護教諭の配置がない。また、スクールヘルスリーダーの派遣状況は週1回3時間程度（令和4年度より兵庫県教委は4時間から3時間に1日の時間数を減らす）であり限りがある。まずは学校行事や校外指導における安全面の確保が急務となっている。生徒が安心して参加し、体験的な学びを深めることできるよう、養護教諭経験者や多文化共生支援者（通訳）等を招聘し、安心して安全な学習環境づくりに力を入れる。 <p>キ. 経済的負担を考慮した効果的な学校行事や校外活動等の在り方について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 校外行事における交通費や運搬費等が高額になると、参加を断念する生徒や経済的な負担を感じる生徒が多くなる。バスやレンタカーの借用代金を補填することで生徒の負担感を緩和し、多くの生徒が体験的な校外活動等に参加できるよう支援体制の充実を図る。 <p>ク. ICTを活用した生徒の学習活動の支援について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校での活動を記録し、動画視聴や写真掲示を拡充させる。生徒が活動を客観的に振り返り、次年度の活動を充実したり、学習内容を個々に深めたりできるよう支援を強化する。 高齢者や外国人向けのカリキュラム開発や不登校経験者支援（学齢生徒も含む）のための相談体制の整備等の研究を深めていく。
調査研究の成果	<p>ア. 高齢者や外国人向けのカリキュラム開発</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大阪産業大学国際学部国際学科 教授 新矢麻紀子氏を教員研修（年1回）の講師として招聘し、「夜間中学における識字・日本語指導について」をテーマにした教員研修を行った。「第二言語としての日本語習得に向けて、即興的対応と長期的対応」や「日本語を教える際に留意すること」など、効果的な日本語指導方法や教育課程の編成等教育活動の充実を図るべく、意見交流を交えながら学びを深めた。

- ・神戸YWCA学院の識字・日本語指導講師 斎藤明子氏を研究授業や研究協議（年2回）に招聘し、教員研修を行った。「イントネーションへの留意方法やジェスチャーを伴うことの大切さ」「物語の読解では、母語での理解はできているのか」や「日本語を使用した時に『しかし～』という論理的な読みは難しい」等、母語と日本語の関係性を捉えた指導の在り方について具体的に学んだ。また、他の教科指導にも活用できる内容であった。
- ・日本の伝統文化である「能」について学習した。鬘と面をつけたり、扇を持って歩く体験をしたりする等、多数在籍する外国籍の生徒にとっては日本伝統文化に触れる絶好の機会となった。また、自身の固有の伝統文化についても話すことができ、異文化交流を活発に行うことができた。

イ. 不登校経験者支援のための相談体制の整備

- ・HEAL ホリスティック教育実践研究所所長の金香百合先生を講師に迎え、「生徒の自尊感情を高めるには」をテーマに、職員研修を行った。様々な背景を持つ生徒が多数在籍しており、個々の生徒一人ひとりの実態に応じた自尊感情の高め方について、研修を行うことができた。
- ・日本チャリティーショップネットワーク共同代表 新田恭子氏を教員研修（年1回）の講師として招聘し、「自分にできること」をテーマにした教員研修を行った。生徒が自分の身近なところでできる社会貢献を考え、実践するきっかけを作ったり、自己有用感・自己肯定感を高めたりするといった人権教育の推進・拡充を図るために必要な学びを深めた。
- ・諸事情により登校できていない生徒に対して、教員研修で学んだことを踏まえた対応・支援を行った。生徒が、休んでいることにより自己否定をすることがないように自己肯定感・自己有用感を抱けるように、また、学習への意欲が低下しないように、電話連絡だけではなく、学習教材等を送付した。

ウ. 他市町村の夜間中学や域内の中学校、近隣の定時制高校との連携

- ・全国夜間中学校研究会第68回埼玉大会では、3年ぶりに参集型で行われ、本分校の教諭が実践発表を行った。また、準備段階から会議等を通して、兵庫県内3校の連携強化はもとより、全夜中研や近夜中協との関係の充実を図ることもできた。他市

町の夜間中学と自校の成果や課題を直接的に聞き、質問や意見交換を行うことができた。先進地域での取組を情報収集するとともに、環境整備を含めた教育活動の充実を図る上で記録誌等も含め、非常に有意義な全国大会であった。

- ・域内の中学校の生徒と交流会を開催した。7名の代表生徒が域内の中学校に行き、生徒作成の学校紹介の動画を見たり、生徒たちからの質問に答えたりし、同じ中学生としての自尊感情向上や学習意欲の向上に繋がった。
- ・近隣の小学校の児童と交流会を開催した。学校の様子を説明したり、児童と一緒にゲームをしたりし、生徒は改めて学ぶ意欲の向上に繋がった。また、当日の2校時には、交流会に出席した生徒による交流会の報告会を行った。
- ・3月に3校交流会（「兵庫県夜間中学校教育振興会」兼 兵庫地区「理事会」）を行った。兵庫県内4校の連携強化について話し合った。教材や指導法を共有し兵庫県の夜間中学のレベルアップを図っていくことを確認し、次年度以降の活動について意見交換をすることができた。

オ. 専門スタッフ（看護師や通訳など）を活用した教育活動の在り方について

- ・高齢な生徒の他に、特別な支援が必要な生徒が、年々増加している中、養護教諭の配置はない。県教委からスクールヘルスリーダー（養護教諭代行）が派遣されているが週1回3時間程度であり、その時間数も昨年度から39時間分削減されており、職員も少人数のため、安心・安全な教育環境の維持は益々難しくなっている。本年度も要所において養護教諭経験者を招聘し、少しでも安心・安全な支援体制を整えるよう努めた。スクールヘルスリーダーにより、調理実習前に食物アレルギーのある生徒への配慮と未然防止及び緊急対応について、また、校外指導前の基礎疾患等の確認と緊急対応について等、教員と連携をはかった対応を行うことによって、今のところ大きな事故は発生していない。
- ・外国籍の生徒が多い中、多文化共生支援員等の派遣回数も週1回4時間程度であり限りがある。まずは学校行事や校外指導に支援員等を別途補完的に招聘し、安全面の確保を優先させた。その上で、生徒の体験的な学びが深まるよう配慮した。支援員等がいる時は学習内容の理解度も高いようで、生徒からの発言

は多く見られた。

キ. 経済的負担を考慮した効果的な学校行事や校外活動等の在り方について

- ・ 校外行事は、中止することなく実施できた。その中で、校外学習では貸し切りバスを利用することで、生徒同士の交友を深めることができ、経済的な負担を軽減することができた。コロナ禍で3年ぶりの実施であった本行事への参加を心配する生徒が多くいたが、経済的負担を軽減したことによって、欠席傾向にある生徒が参加する等、最終的に42%と半数に近い生徒の参加へと結びつくことになったと考えられる。

ク. ICTを活用した生徒の学習活動の支援について

コロナ禍で中止等になっていた行事が数年ぶりに実施できたことにより、校内には行事の様子の写真や日々の学習の様子を掲示することができた。掲示により、生徒が客観的に学習を振り返ることができるようになった。また、授業においても、動画教材を適宜使用し、生徒の学習理解に繋げることができた。